

## 館林キリスト教会 デボーションノート（2008年）

9月 1日 今日の通読箇所 イザヤ書 5章8～17  
「貧富の差」

キリストは山上の説教の序論で、「幸いなるかな」の言葉で、祝福の条件を七つ挙げた。ところがイザヤの4、5章には「わざわざいなるかな」という神の呪いの言葉が七回出てくる。六回までは5章に、当時のイスラエルに対する裁きの言葉としてあらわれ、また6章には、預言者イザヤが神に示された自分の罪を嘆く言葉として出てくるが、これも意味深いことだと思う。イスラエルの罪とは何か。権力者が限りもなく財を増やし、贅沢と歓楽に明け暮れ、貧しいものが困苦のうちに放置される状態はその一つだ。これは資本主義社会の罪悪として指摘されるところだが、いまや、共産主義社会の同病もまた明白だ。

9月 2日 今日の通読箇所 イザヤ書 5章18～30  
「罪の社会」

[19節]には神とその裁きに対する大胆な侮蔑の言葉がある。[20節]はいわゆる詭弁だ。[21節]には独特の自信、ふてぶてしさが言われている。[22節]は快楽に明け暮れる様子が、[23節]には賄賂の横行が書かれている。これがイザヤ時代のイスラエル社会の、実態だったのだ。しかしこれをそのまま現在の日本に置き換えても通用するようだ。人間の罪の姿は、昔も今も変わらないと見える。しかしイザヤは続いて[24節]以下に、イスラエルに対する神の裁きを語らなければならない。東方の強大国アッシリヤはすでにイスラエルに対して食指を動かし、虎視眈々と狙っている。彼等の凶暴な軍隊が襲いかかって来るだろう。

9月 3日 今日の通読箇所 イザヤ書 6章1～13  
「聖なる臨在」

イザヤは神殿の礼拝において常ならぬあざやかな主の臨在に触れた。すばらしい経験だったが、かえって、ここでイザヤは深刻に自分の罪を自覚する。今までイスラエルについて「わざわざいなるかな」と警告したのに、実は自分も彼等の仲間、程度の差こそあれ「わざわざいなる」存在であるにかわりがないことを告白するに至った。ここで主の取扱いを受けたイザヤは、いよいよ本格的な預言者として立ち上がることになった。しかし彼が預言すると、かえって人々の心が堅くなるような、苦しい辛い奉仕も、覚悟しなければならなかった。

9月 4日 今日の通読箇所 イザヤ書 7章1～17

「処女懐胎」

イスラエルの王ベカが異邦のスリヤ王と結託して、同胞ユダを攻める。しかもその計画が、異邦の王家タビエルの子をもって、ユダ王家の血統に換えようという陰謀のためだった。まことに言語同断だ。イスラエルでは悪政と革命の結果、王家はいくつも入れ替わった。やがて救い主が生まれる予定のユダの王家の方は、一統連綿としている。これを憎み妬んでの戦争だった。怯えたユダ王にイザヤは語る。「恐れてはいけない。神は約束の血統を守り給う。ユダの一処女が男子を産む。これがその標だ」と。やがてこの預言はマリヤとキリストとにおいて、完全な成就を見るのだ。

9月 5日 今日の通読箇所 イザヤ書 7章18～25

「国土の荒廃」

イスラエルはもともと遊牧民だが、次第に農業に進んできた。農業は遊牧に比べて50倍の生産があり、それだけ生活も向上し、文化も発達するというものだ。いまイスラエルは、シリヤと一緒にあって、同胞ユダヤを攻めたので、神の怒りを買うことになった。やがて彼等の裁きのために、さらに東方の強大国アッシリヤの、蠅のように群がる軍隊が全地を攻撃し、国を荒しまわることが預言されている。即ち耕された畑も再び荒野と化して、弓矢で狩猟するようになる。わずかな家畜の乳で満足するほど、生活程度は下がるのだ。まるでイスラエル王と全国民は、敵国の剃刀で髭を剃られた、捕虜のようだと。

9月 6日 今日の通読箇所 イザヤ書 8章1～22

「預言のしるし」

イザヤは続いてダマスコ(シリヤの都)サマリヤ(イスラエルの都)。ひいては必要以上に震え上がっている不信仰のユダにも、襲いかかろうとする、アッシリヤ軍の攻撃を預言する。[16節]以下は、この警告の預言が、同胞に受け入れられないイザヤの悲しみの言葉だ。今は後日の証のために、この預言を集め、記録し封印して、預言者の結社、つまり弟子たちの中に保存して置こうと言うのだ。「主は不信仰、不従順のイスラエルに対し、そのみ顔を隠しておられるが、我々はあくまで主に祈り、主を待ち望もう。我々こそが、やがての救いのために、証としてこの国に留めて置いて下さる、わずかな『しるし』なのだ」と。

9月 7日 今日の通読箇所 イザヤ書 9章1～12

「救いの光」

イザヤ書のような預言書は「詩」の形で書かれている。従って「挿入文」が多

い。裁きの宣告の間に救いの約束が挿入されたり、キリストの栄光の叙述の間に、その苦難の預言も語られる、という調子だ。ここではイスラエルとユダの罪を指摘し、その罰としてアッシリアの攻撃を預言する間に、やがて与えられる救い主キリストを示している。罪も罰も、呪いも暗黒も、救いの光を受け、平和と繁栄と喜びに満たされる。キリストは一人のみどり子としてお生まれになるが、やがて神の栄光を受け、ダビデの位について世界を支配するのだと。

9月 8日 今日の通読箇所 イザヤ書 9章13～21

「罪の山火事」

南米あたりの広大な地域では山火事もけた外れに恐ろしい。逃げるも走るも間に合わない。人も動物も町も村も焼き尽くしてしまう。しかし罪の山火事はもっと恐ろしい。神を恐れる心が失われ、不潔、低級、不道徳が蔓延する。そしてわざわざ神様が天から火を降らせないでも、人間同士の愛が枯渇し、自己中心と貧欲と、他人に対する冷酷から、闘争、戦争と、弱肉強食の火が社会全体に燃え広がる。仏教にいわれる「火宅」だ。実はこれは今現在の社会の現実とも受け取れる。ペテロはペンテコステの説教の中で人々に警告して言う「この曲がった世から救われなさい」と。

9月 9日 今日の通読箇所 イザヤ書 10章1～11

「権力の不正」

権力者の不正はいつの時代でも目に余るものだ。強国の小国に対する横暴も、幾らでも数え上げることができる。この世では結局弱いもの小さいものはいつでも泣き寝入りだ。しかし神はこの事態をいつも見ておられる。民を守り養うために権力を託された人々が、本来の役目から逸脱し、極端な弱いものいじめをすれば、ついには神の罰を受ける。ヒトラーもムッソリーニもスターリンも最後には裁かれた。ここでいま、イスラエル、ユダが裁かれようとしている。その裁きの使者として派遣されるアッシリアも、いい気になっていばり、極端な乱暴を働けば、やがて同じように神の裁きを受けることになるのだ。

9月10日 今日の通読箇所 イザヤ書 10章12～19

「斧の誇り」

興隆の絶頂期のアッシリアは、神の裁きを執行する器として、選民イスラエルを攻撃することを許された。しかし「斧が用い手に対して誇る」ように誇るならば、今度は逆に自分が神の裁きに遭って滅ぼされる。時代は移り、権勢も凋落する。終末の時が来ると今度は反対に、悔い改めたイスラエルが神の祝福を受けて、諸国を支配するようになる。あくまでも神に逆らうならば、今度はイ

スラエルが神に代わって諸国を裁くことになる。しかし、[13,14 節]は、うっかりすると我々も言い兼ねない、恥ずべき傲慢の言葉だ。「自分が自分の力でやったのだ」と誇らぬように、注意深く主だけを崇めてゆきたい。

9月11日 今日に通読箇所 イザヤ書 11章1～16  
「中間時代」

この章の最初の部分は、キリスト誕生の預言で、よくクリスマスに勉強するところだ。後半はキリストの再臨と栄光、再臨によって完成する神の国の平和、イスラエル民族の許しと救いと勝利、繁栄が預言されている。ここにはキリストの召天から再臨までの中間の時代の記述が抜けている。この間こそ、異邦人の教会が全世界に伝道するいわゆる教会時代なのだ。ユダヤ人はこのことを深く理解できなかった。そのため救い主はいきなり栄光の王としておいでになると期待しすぎ、実際の主の受難の姿に失望し、排斥したのだった。

9月12日 今日に通読箇所 イザヤ書 12章1～6  
「救いの喜び」

自分たちの先祖の罪のためとはいいいながら、ユダヤ人は長い間神の裁きを受けて、亡国の民として全世界に放浪し、多くの苦難を経験してきた。しかし最後には罪も許されて、再び神にえられた選民としての、栄光と使命に回復する。これはイザヤ書に繰り返される一つのテーマだ。しかしそれと同時に、ここに歌われている救いの感謝と賛美はそのまま異邦人の中から救われた、我々クリスチャンの賛美である。「見よ、神はわが救いである。私は信頼して恐れることはない」とは、なんとすばらしい信仰の告白であろうか。この信仰が我々にも与えられたことは、何とすばらしく、尊い神のあわれみだろうか。

9月13日 今日に通読箇所 イザヤ書 13章1～16  
「バビロン滅亡」

人の世の栄枯盛衰ほど定めなきものはない。「驕る平家は久しからず」という言葉のとおりだ。バビロンはBC600年ごろから栄えた最初の古代帝国で、その版図はペルシヤ湾から地中海に及んでいた。ユダヤが完全に滅びたのはこの国の攻撃を受けた結果だった。しかし全世界を占領して大帝国となり、奢り高ぶったこの国もやがて滅亡する時が来ると、彼等が他国攻撃の際に行った残虐行為を、今度はそのまま、自国民が受ける運命に見舞われるのも仕方がない。これが神の裁きであって、歴史に繰り返された事実だ。イザヤはここで、やがて来るバビロン滅亡の様子を、目にみるように預言しているのだ。

9月14日 今日の通読箇所 イザヤ書 13章17～22

「無欲の強さ」

バビロンはメデヤに滅ぼされるというのがそのメデヤについて「しろがねをも顧みず、黄金をも喜ばないメデヤ」と言っている。これはその強さの理由だった。昔の平家は、無欲で強い軍隊の力で天下を取った。しかし間もなく彼等は、京都宮廷の、貴族公卿の文化を見習い、柔弱になっていき、今度は東国の、無欲で強い、野武士集団の源氏に滅ぼされた。西郷隆盛は金も命も名もいらぬ人間ほど始末に悪いものはない。しかしそんな人間でなければ、共に天下を語るに足りない」と言った。聖書にも「金銭を愛することはすべての悪の根である」とあり、これが少なくもクリスチャンの霊的な力を失わせることは事実だ。

9月15日 今日の通読箇所 イザヤ書 14章1～11

「強国と弱小国」

イスラエルは自分たちの罪のためにバビロンに滅ぼされた。彼等はその後も、数千年の間亡国の民として世界に放浪し、迫害を受けた。ナチスドイツによる数百万人虐殺のような悲惨なケースもあった。これは神の裁きである。しかし強い民族と国家による、弱い民族の圧迫は、世界的、歴史的な一般現象だ。さてやがて世界に終末がくる。その時神は強大国の横暴を裁きたもう。弱小な民族もその時には所を得るのだ。特にイスラエルの審判の期は満ちて、彼等の回復と祝福と勝利の日がくる。選民に対する神の約束は成就する。これは繰り返し語られるイザヤのテーマだ。

9月16日 今日の通読箇所 イザヤ書 14章12～21

「悪魔の墮落」

傲慢と贅沢に耽るバビロン王が、たちまち神の裁きのもとに滅亡し、敗北と恥辱にまみれるさまが、ここにも預言されている。しかし、バビロン王の預言にしては異常に大きく強い表現になっている。そこで昔から「これは合わせて悪魔の墮落の事が言われているのだ」という解釈が行われて来た。悪魔は最初は最高の天使だった。しかし彼は神に対する傲慢と反逆に陥って、ついに神の裁きを受け、天を追われ地獄に落ち、ついに神に逆らう存在となったのだといわれるのである。「神は高ぶる者をふせぎ、へりくだる者に恵みをたもう」とあり、真に心すべきことだ。

9月17日 今日の通読箇所 イザヤ書 15章1～9

「火事場泥棒」

火事場に紛れ込んで泥棒をするのは最低だ。イスラエルの国力が衰えて、アッ

スリヤ、バビロンに滅ぼされた時、近所の劣等民族と一緒に攻め込んでイスラエルを略奪した。彼等について、14章でペリシテ、この章ではモアブ、続いてシリヤ、その他の国の裁きが記してある。大戦の末期、当時の中立国ソ連を通して、米英に降参しようとする斡旋を頼んだ日本に、いきなりソ連軍が攻撃をかけて来た。これも一種の火事場泥棒だから、その後長く日本人のソ連不信を招いたのも、仕方がなかったと思う。

9月18日 今日に通読箇所 イザヤ書 16章1～14

「傲慢と涙」

[6節]にモアブの傲慢な態度が書いてある。いわゆる「中身の無い、自信傲慢」だ。[9節]には神の裁きを受けて、衰亡に陥った時の彼等の涙が記してある。まるで「涙の洪水」のありさまだ。しかも[12節]にあるように、その時「聖所にきて祈っても」その祈りは聞かれないから効果はなく「ただ疲れるだけだ」という。これは悔い改めない罪人の姿だ。黙示録にも、最後の裁きの日に神の怒りにさらされるよりは洞窟に隠れて、山や岩に向かい「我々の上に落ちかかって、主の怒りの顔から隠してくれ」と叫ぶ王侯貴族が出てくるのだ。

9月19日 今日に通読箇所 イザヤ書 17章1～14

「鳴り轟く諸国」

シリヤの首都ダマスコは、世界で最も古い町の一つだといわれているが、イザヤはこの町についても滅亡を予言している。この辺はほとんど諸国滅亡の予言が繰り返されているのだ。「ああ多くの国は大水のように、鳴りとどろく。しかし神は彼等をもみがらのように、塵のように追いやられる」と[13節]に言われている。ソ連はもとより、東ヨーロッパも鳴りとどろき、日米構造協議も、空母ミッドウェイも爆発で鳴りとどろき、日本の株主総会も鳴りとどろいている。「しかし神は(やがて)彼等を懲らしめられる。夕暮れには恐れがある。夜の明けないうちに彼等は失せた」[14節]。ああこれでさっぱりした。

9月20日 今日に通読箇所 イザヤ書 18章1～7

「落魄(らくはく)のエジプト」

イザヤの預言はほとんど全篇美しい詩である。声に出して朗唱するとよく分かる。ここと次の章にわたってエジプトに関する預言がある。[1,7節]のエジプト人の描写などはすばらしく、古いエジプトの壁画か彫刻を見るようだ。[4～6節]には独特のエジプトの気候や収穫、またその果樹園も荒れはてて、そこに動物がごろごろしている様子なども、みごとに描かれている。しかしこれは文学ではない。繁栄し、のさばっている国に対する、主の怒りの預言だ。いまエジブ

トに行けば、この預言が成就した結果をよく見ることができる。昔の栄光と、いまの貧しさを比較すれば、誰しも感慨なきを得ないでしょう。

9月21日 今日に通読箇所 イザヤ書 19章1～15  
「深い因縁」

昔イスラエルは、エジプトに寄留して、農業技術や社会組織、学問芸術を学んだ。その反面迫害を受けて絶滅の危機にさらされ、神の干渉によって救われた。その後もイスラエルは、南方の強大国エジプトと、北方のスリヤ、バビロンなどの強大国に挟まれた小国の苦労を長く経験してきた。その因縁は浅くない。戦後も両国はシナイ半島を戦場に何回も戦った。今はサダト大統領等の尽力で国交が回復し、経済的にも立ち直りつつある。しかし行ってみるとやはり両国境の警備は厳しく、将来の予断は難しい。でもこの章の終わりにイザヤが、やがて両国も共に神に仕えるという預言を語っているのは嬉しい。

9月22日 今日に通読箇所 イザヤ書 20章1～6  
「身体と行為の預言」

大国に挟まれた小国イスラエルは、しばしば大国の軍隊の通行路となり、迷惑することも多かった。いまアッシリアの軍勢はエジプト攻撃の基地としてアシドドを攻め、イスラエルに不安を与えた。このとき預言者イザヤは神に命ぜられて、裸はだして歩き、やがて、エジプトがアッシリアに大敗することを身をもって預言した。この預言は、のちアッシリアのエサルハドンによって成就した。言葉だけでなく身体と行為で預言する。こんなやりかたもしばしば用いられた、預言のスタイルなのだ。

9月23日 今日に通読箇所 イザヤ書 21章1～12  
「預言者の涙」

この章の三つの地名はアラビヤ以外はよく分からない。彼等は「食卓を設け、じゅうたんを敷いて飲み食いする」。しかしその滅亡を知る預言者イザヤの心は、産婦のように苦しいのだ。多くの預言者、伝道者は滅びゆく魂の運命を思って泣いた。泣きながら伝道したのだ。キリストもエルサレムを見おろしてしばしば号泣したと伝えられている。ライス博士は、説教の間、いつも涙が頬を濡らしていた。ある人が「感情的に過ぎる」と忠告すると、「あなたは人が地獄に落ちる話を、泣かずにできるのか」とかえってげげんな顔をされたそうだ。

9月24日 今日に通読箇所 イザヤ書 22章1～14  
「その日暮らし」

[12,13 節]には、神様が人間に、へりくだり罪を悲しみ、悔い改めるように命じているのに、人間たちが耳にもかけず、その日その日を空しく遊び暮らす様子が描かれている。彼等の言葉は「われわれは食いつ飲もう。明日は死ぬのだから」だ。永遠も未来も、神のことも魂のことも、罪も裁きも考えず、ただ日々の快樂に自分をごまかしている。釈迦が牧場を通ると、牛たちがのんきに草を食べている。釈迦は弟子たちに「牛は殺されて一日で半数に減ったのに、彼等はのんきに遊んでいる。ああ悟りなき者の哀れさよ」と言ったそうだ。

9月25日 今日に通読箇所 イザヤ書 22章15～25

「権力の交替」

セブナは有力な官吏、また政治家であったようだ。権力を利用して土地を手に入れ、高いところに墓を造ったのはよほどの権勢だったのだろう。しかし預言者の言葉のように彼は間もなく失脚した。本人はころころまりのように放り出され、人目をそばだてた華麗なその乗用車も放置された。それに代わったエリヤキムは、エルサレムの父と呼ばれ、主の祝福によって、開くも閉じるもすべてうまくゆく。彼はしっかりした釘のように、あらゆる責任を引き受けても心配ない。何という相違だろう。我々も高ぶり、勝手なことをして神様に叱られないように、注意柔く謙遜に、神に従ってゆかねばならない。

9月26日 今日に通読箇所 イザヤ書 23章1～18

「難しいイザヤ書」

交読が「イザヤ書」に入ってから、文章の理解が難しいかも知れない。その理由はいろいろある。第1にこれは詩文なので直接的な表現よりも、詩的な言いまわしが多い。第2に預言書で、まだ起こっていない出来事の暗示的な叙述が多いからなおさらだ。第3に、知らない地名や、歴史的な状況が出てくる。「地歴」の苦手な人はお気の毒です。でもだんだん聖書を「地歴」のセンスでお読みになると、聖書を読むのがとても面白くなりますよ。礼拝で読まない、こういうところは、一生全然、目を通さない恐れもあります。それも残念ゆえ、辛抱して、暫く、交読を続けましょう。

9月27日 今日に通読箇所 イザヤ書 24章1～13

「土地と住民」

[5 節]に「地はその住む民のしたに汚された。これは彼等が律法に背き、定めを犯し、とこしえの契約(全部聖書の事)を破ったからだ」とある。一体土地はそこに住む人の管理いかんで、ずいぶん様子が変わってくる。スイスなどへ行くと、国全体が庭園のようだ。エジプトは、近頃だいぶ良くなってもまだ「全国



総ゴミ捨て場」の感がある。いまイスラエルは、せつかくの選民でありながら、聖書の教えを守らず、罪を犯したために、呪われ、敗戦し、捕虜として世界各地に散らされることが預言してある。そのあと、「乳と蜜の流れる良き地」も、住む人もなく荒れ果ててしまうのだ。

9月28日 今日に通読箇所 イザヤ書 24章14～23

「終末の地震」

神に従わず、この地上を権力と罪で汚染した人間に対して、終末に臨む裁きの現象の一つに地震がある。キリストもオリブ談話の中で「その時は、民は民に国は国に敵対して立ち上がるであろう。またあちこちにききんが起こり、地震があるであろう」と言われた。[17節]以下に地震の描写がある。本当にその時は、堅固だった地面は崩れて落とし穴になり、安住していた家は、我々を捉えて殺すわなに早変わりするのだ。そこからやっと逃げ出しても、また地の陥没に呑み込まれる。恐ろしいことだ。

9月29日 今日に通読箇所 イザヤ書 25章1～12

「回復の預言」

イスラエルはその罪のゆえに神の裁きを受け、外国の軍隊に踏みにじられる。その結果、彼等もようやく悔い改めるのだ。神はあわれみによって、悔い改めたその罪を許し、彼等を再び祝福してくださるのだ。回復した彼等は世界の祝福のもととなる。かくてアブラハムに与えられた約束は(彼等の繰り返しの罪にもかかわらず)成就するのだ。イスラエルの裁きと亡国を預言してきたイザヤも、次第に終末における回復に預言を進める。その時にはイザヤの言葉も明るく、光を放つようになるのだ。

9月30日 今日に通読箇所 イザヤ書 26章1～15

「神の愛と真実」

終末の日に、主のあわれみをうけ、恵みに回復したイスラエルの詩である。「その日ユダの国で、この歌を歌う」というその歌は、すばらしい信仰の告白であるとともに、いまやユダが神に立てられて、ふたたび世界の信仰と礼拝の中心となったことをうかがわせる。なんとすばらしい終末の日の希望であろうか。「主よ、あなたはわれわれのために、平和を設けられる。あなたはわれわれのために、われわれのすべてのみ業をなしとげられた」[12節]このようにイザヤは、人間の罪と失敗を乗り越え、最終的な、神の愛と真実の成就を預言する。